

サムエル記第一 (18)

「サウルを王として選ぶイスラエル (2)」

1 サム 10 : 17~27

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1~9 章)

II. サウルの治世 (10~31 章)

A. サウルの確立 (10~14 章)

1. サウルを王として選ぶイスラエル (10 章)

2. 注目すべき点

- (1) 1~16 節は、私的な任命である。
- (2) 17~27 節は、ミツパでの公的な宣言である。
- (3) くじによる選出は、神の主権を示している。
- (4) サウルは外見において王にふさわしい人物であった。
- (5) 民の反応は一致していなかった。

命題：神は、ご自身の主権によって指導者を立てられる。

この箇所を三つに区分して学ぶと、それがよく分かる。

I. 神は、ご自身の権威によって指導者を選ばれる (17~24 節)

1. 17~18 節

1Sa 10:17 サムエルはミツパで、民を【主】のもとに呼び集め、

1Sa 10:18 イスラエル人に言った。「イスラエルの神、【主】はこう言われる。『イスラエルをエジプトから連れ上り、あなたがたを、エジプトの手と、あなたがたを圧迫していたすべての王国の手から救い出したのは、このわたしだ。』

- (1) サウルの公的即位を前に、神学的な前置きが確認される。

①神こそがイスラエルの真の王であることが再確認される。

(2) ミツパという場所

①7 章では、民が悔い改めた場所

②サムエルがイスラエルを導き、ペリシテ人に勝利した場所

③「エベン・エゼル」の勝利へとつながる場所 (7 章)

④つまり、王政は神との契約とは切り離されていないことを示している。

⑤民は、神の臨在の前で集められた。

(3) なぜ出エジプトを持ち出すのか。

- ①わたしがあなたがたを救った。
- ②わたしがあなたがたを導いた。
- ③わたしがあなたがたを守った。
- ④つまり、イスラエルの真の王は、これまでずっと【主】ご自身であった。

(4) 「すべての王国の手から救い出した」は、士師記の歴史全体を要約している。

- ①モアブ、カナン、ミデヤン、アンモン、アモン、ペリシテ
- ②神ご自身が王として民を救ってこられた。

2. 19 節

1Sa 10:19 しかし、あなたがたは今日、すべてのわざわいと苦しみからあなたがたを救ってくださる、あなたがたの神を退けて、『いや、私たちの上に王を立ててください』と言った。今、部族ごと、分団ごとに、【主】の前に出なさい。」

(1) 王を求めたことは、「神を退ける」行為であった。

- ①民は、サムエルを退けたのではなく、神を退けた。
- ②イスラエルは神への信頼を失い、「人間の王」に安全保障を求めた。

(2) 神は、ご自身の恵みを忘れないように求められた。

- ①イスラエルの問題は、「忘恩の罪」である。
- ②神の恵みを忘れることがしばしば不信仰の始まりになる (申 8 章)。

(3) 神は民の願いを受け入れても、その罪を正当化されたわけではない。

- ①神は時として、人間の間違った願いを許される。
- ②詩 106 : 15

Psa 106:15 そこで 主は彼らにその欲するものを与え 彼らのいのちを衰えさせた。

- ③それでも神の救済計画は前進する。

3. 20～21 節

1Sa 10:20 サムエルは、イスラエルの全部族を近づかせた。すると、ベニヤミンの部族がくじで取り分けられた。

1Sa 10:21 そして、ベニヤミンの部族を、その氏族ごとに近づかせた。すると、マテリの氏族がくじで取り分けられた。そして、キシユの息子サウルがくじで取り分けられた。人々はサウルを捜したが、見つからなかった。

(1) くじは神の御心を示す手段

①旧約時代のくじは、神のご意思を明らかにする方法であった。

②箴 16 : 33

Pro 16:33 くじは膝に投げられるが、そのすべての決定は【主】から来る。

③サムエルは、すでに 1～16 節でサウルに油を注いでいた。

④改めてくじを用いる理由は、民全体が「これは神の選びだ」と認めるため。

(2) ベニヤミン族が選ばれた意味

①最も小さな部族の一つから王が選ばれる。

②神は人間の評価ではなく、ご自身の自由な恵みによって選ばれる。

(3) 段階的な選びの意味

①この進み方には文学的効果がある。

②これは神の選びが徐々に明らかになることを印象づけている。

4. 22～23 節

1Sa 10:22 人々はさらに、【主】に「あの人はもう、ここに来ているのですか」と尋ねた。【主】は「見よ、彼は荷物の間に隠れている」と言われた。

1Sa 10:23 彼らは走って行って、そこから彼を連れて来た。サウルが民の中に立つと、民のそれよりも、肩から上だけ高かった。

(1) 人間は、神の選びを無効にすることができない。

①サウルは選ばれたにもかかわらず姿を現さなかった。

②【主】はサウルの居場所をご存じで、その場所を示された。

(2) 「荷物の間に隠れた」とは何を意味するのか。3つの可能性。

①自分は王にふさわしくないという思いから隠れた（謙遜）。

②王となる責任を恐れた（不安）。

③謙遜と不安の両方のゆえに隠れた。

④後のサウルの性格を暗示しているように見える。

⑤神よりも人を恐れるようになる。

(3) 民は外見に感動した。

①「肩から上だけ高かった」

②8 章 5 節の「諸国のような王」という願いとの対応がある。

③つまり、神は民が望んだような王を与えられたのである。

5. 24 節

1Sa 10:24 サムエルは民全体に言った。「【主】がお選びになったこの人を見なさい。民全体のうちに、彼のような者はいない。」民はみな、大声で叫んで、「王様万歳」と言った。

(1) 「【主】がお選びになったこの人を見なさい」

①サウルの権威の源は神にある。

(2) 「彼のような者はいない」

①第一には、外見的な卓越性を指す。

②サウルは、民の期待にかなう人物であった。

(3) 「王様万歳」(イエヒー・ハメレク)

①「王よ。生きながらえますように」

②これは古代近東で王に対して語られた祝福の言葉である。

③「万歳」は中国に由来する言葉で、「一万年生きよ」「永遠に栄えよ」の意味。

④「長く繁栄してください」「未永く治めてください」という祝福の言葉。

⑤この時点では、民はサウルを歓迎している。

II. 人間の王も神の支配の下にある (25 節)

1. 25 節

1Sa 10:25 サムエルは民に王権の定めについて語り、それを文書に記して【主】の前に納めた。それから、サムエルは民をみな、それぞれ自分の家へ帰した。

(1) 「王権の定め」とは、王政の基本原則である。

①王の権限

②王の責任

③民との関係

④神との関係

(2) 王も神の契約の下に置かれる。

①これがこの節の最も重要な神学的メッセージである。

②古代近東では、王はしばしば絶対的な権力者であった。

③しかしイスラエルでは、王も神の律法に従う者である。

④つまり、神が真の王であり、地上の王は神の代理者である。

(3) 「文書に記して」

①王にも、民にも、守るべき基準が与えられた。

②神の支配は、人間の気分ではなく、啓示されたみことばによって行われる。

(4) 「【主】の前に納めた」

①「【主】の前」とは、神の臨在の前、つまり聖所を指すと考えられる。

②神ご自身が、この契約の証人になられる。

③しかしサウルは、13 章と 15 章で、神の律法に違反する。

III. 神は、王を支える人々を備えられる (26～27 節)

1. 26 節

1Sa 10:26 サウルもギブアの自分の家へ帰って行った。神に心を動かされた勇者たちは、彼について行った。

(1) サウルはすぐに王宮を築いたのではない。

①当時のイスラエルには、まだ王政の制度が整っていなかった。

②サウルはなお故郷ギブアを拠点とし、11 章までは本格的な統治を始めない。

(2) 「神に心を動かされた勇士たち」

①彼らが自発的にサウルを支持しただけではなく、神が彼らの心を動かされた。

②これは旧約でしばしば見られる神の働きである。

* 出 35 : 21 (幕屋建設)

* エズ 1 : 5 (神殿再建)

③勇士たちは神から与えられた支えである。

2. 27 節

1Sa 10:27 しかし、よこしまな者たちは、「こいつがどうしてわれわれを救えるのか」と言って軽蔑し、彼に贈り物を持って来なかった。しかし彼は黙っていた。

(1) 「よこしまな者たち」とは誰か

①特定の集団名ではなく、神を恐れず、共同体の秩序を乱す人々を指す。

* エリの息子たち (1 サム 2 : 12)

* ギブアの暴徒 (士 19 : 22)

(2) 「こいつがどうしてわれわれを救えるのか」

①これは、サウル有能力に対する疑いである。

* ベニヤミン族の出身

* 荷物の間に隠れていた

* 経験も実績もない

②彼らは、サウルだけでなく、神の選びそのものを軽視している。

(3)「贈り物を持って来なかった」

①古代近東では、新しい王に贈り物を献げることは、忠誠の表明である。

②贈り物を持って来なかったのは、新王を認めないという意思表示である。

(4)「しかし彼は黙っていた」

①サウルは、侮辱されても、処罰しなかった。

②これは、王として非常に立派な態度である。

③初期のサウルには謙遜さと自制心があった。

結論：今日の信者への適用

1. 神が立てられた指導者を尊重しよう。

(1) 神が選ばれたサウルに対して、賛成する者も反対する者もいた。

(2) しかし、神はご自身の主権によって王を立てられた。

(3) 今日、教会には牧師、長老、執事など、神が召された指導者がいる。

(4) もちろん指導者は完全な人ではない。

(5) 神の権威に従う限り、指導者を敬い、協力することは、神を敬うことにつながる。

(ヘブル 13 : 17)。

2. 召されたなら、弱さを理由に逃げない。

(1) サウルは荷物の間に隠れていた。

(2) 私たちも、「自分には無理です」「資格がありません」と感じることもある。

(3) 神の召しには、神の助けが伴う。

(4) 自分の能力ではなく、神の恵みに信頼して一歩を踏み出すことが大切である。

3. 神の働きには賛否が伴う。

(1) サウルには、神が心を動かした勇士たちが与えられた。

(2) 一方で、彼を軽蔑する者たちもいた。

(3) 教会の働きでも同じである。すべての人が賛成するとは限らない。

(4) 人の評価や批判に左右されるのではなく、神に忠実であることを第一とすべき。